

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 2 年 4 月 2 8 日現在

機関番号：3 4 4 1 9

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：1 6 K 1 7 2 5 0

研究課題名（和文）情報化時代におけるムスリム女性の信仰と社会参加 質的調査に基づく国際比較研究

研究課題名（英文）Faith and Social Participation of Muslim Women in the Information Age:
International Comparative Qualitative Research

研究代表者

安達 智史（Satoshi, Adachi）

近畿大学・総合社会学部・准教授

研究者番号：9 0 7 5 6 8 2 6

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代社会に生きるムスリム女性の信仰と社会参加の関係について明らかにするため、イギリス、マレーシア、日本の三カ国を対象とした質的調査手法（インタビュー、フォーカス・グループ）に基づくデータの分析をおこなった。その結果、女性たちの間で、現代社会とイスラームとが対立するという考えは薄く、逆に社会への参加をイスラームに言及することで正当化している点がみられた。これは、情報化によって、彼女たち自身の手によるイスラーム解釈の可能性が開かれたことが原因と考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、西洋社会のムスリムの実際の声に基づき、女性個人の解釈実践を通じたイスラームの生きられた側面に焦点を当てた点で意義がある。また、それにより、「抑圧の犠牲者」あるいは「近代に適應できない存在」といった硬直的な表象が与えられてきた「ムスリム女性」像を相対化し、生き生きとした主体としての女性の姿を描くことができた。この点は、教義中心かつ集合的に論じられてきた既存のイスラーム理解を変容させる点で、社会的にも大きな意義を有している。

研究成果の概要（英文）：This research aims to investigate the relations between faith and social participation among modern Muslim women based on the data from international comparative research; Britain, Malaysia and Japan. It concludes that contemporary Muslim women deny the existence of conflicts between modern lifestyle and Islam, but rather they justify their participation in wider societies by referring to Islam. This result contributes to new understanding of modern Muslim women, who engage more positively both in their religion and society.

研究分野：社会学

キーワード：ムスリム女性 イスラーム 解釈実践 情報化 国際比較研究 質的調査 ジェンダー意識

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1．研究開始当初の背景

女性の身体は、文化的・社会的アイデンティティのシンボルとして、善き社会秩序の理想と不可分に結びつき、それゆえに、政治的に議論され管理と介入の対象となる。今日のグローバルな政治社会において、そのような議論の客体となる身体を有しているのが、「女性ムスリム」である。西洋社会のメディアの中で、女性ムスリムは、家父長的支配の「犠牲者」、あるいは主流社会の文化から家族を保護し、非民主主義的な文化や過激主義的思想を育てる「苗床」として描かれている。その結果、彼女たちは、（新）自由主義的イデオロギーに基づく「解放の政治」の客体という地位に置かれることを強いられている。

そのような政治的言説に対して、近年、多くの若者女性ムスリムが異議を唱え、自らの信仰と社会における役割をめぐる論争に主体的に参加している。1980年代にはクルアーンのフェミニズム解釈が世界的に大きく前進し、それに触発された社会学、地理学、人類学、教育学の領域において、「ムスリム女性」の主流社会制度への参加をめぐる数多くの議論が生産された。その中で、スカーフに込められた肯定的意味、女性の教育・労働システムへの参与のあり方、ライフプランをめくり交渉する女性の姿が描かれた。

だが、従来の研究には、下記の問題があった。第一に、急速に広がる情報化が、若者の信仰や女性のエージェンシーに与える影響について検討した研究が十分ではないこと。第二に、これまでの女性ムスリム研究の多くは一カ国を対象にしたものが多く、共通のフォーマットに基づく比較研究はほとんど存在しないこと。加えて、第三に、アジア系、特に日本の若者女性ムスリムをめぐる研究は世界的に僅かであること。その結果、第四に、女性ムスリムの信仰と社会参加をめぐる関係に、グローバル化（ex.情報化や新自由主義）が、実際にどの程度インパクトを与えているのかが十分に明らかにされていないことが挙げられる。以上の限界に取り組むことが、本研究が有する独自性であり、求められている背景となっている。

2．研究の目的

本研究は、ポスト 9.11 という時代背景のなかで、否定的な表象を与えられがちなムスリム女性が、いかに西洋社会あるいは現代社会に適応しているのか、そしてその際、信仰はどのような意味を有しているのかを検討することを目的としている。そのため、本研究は、若者女性ムスリムの信仰と社会参加の関係づけの様式を、質的調査・分析手法を用いた国際比較を通じて探求した。具体的には、「情報化によるイスラームの<知識>の普及」および「スタディ・サークルの役割」に着目しながら、彼女たちがイスラームとどのように関わり、それが社会への参加といかなる関連を有しているのかを検討した。その際、グローバル化の影響を分析するために、イギリス、マレーシア、日本という異なる政治的・文化的・社会的環境にある女性ムスリムを比較した。以上の調査から、若者女性ムスリムの信仰をめぐる「主体性（agency）」のあり方、イスラームの<知識>の社会参加に与える積極的／消極的影響、イスラームとシティズンシップ（＝市民であること）の関係について議論を深めた。

3．研究の方法

本研究は、(1)文献研究、(2)調査、(3)分析と報告という三つの段階により実施されている。(1)文献研究では、グローバル化と文化変容のメカニズム、情報化とイスラーム、ムスリム女性のアイデンティティというテーマを設定し、先行研究を整理した。(2)調査では、イギリス、マレーシア、日本の若者女性ムスリムへのインタビュー、およびフォーカス・グループをおこなった。その際、イスラームの<知識>へのアクセス、ムスリムへの社会的評価の認識、教育・労働キャリア、民族性、ジェンダーをめぐる意識などの論点を設定した。(3)分析と報告では、問題意識（ex.女性ムスリム、アイデンティティ、社会統合、情報化と<知識>）と、先行研究で析出された論点を踏まえ、調査で得られたデータを「主題分析」により解析した。調査成果は、国内／国外のジャーナルや学会において発表された。

4．研究成果

本研究は、以下 3 つの調査研究に基づきおこなわれ、成果が発表された。

(1)日本の改宗者ムスリム女性研究

2016 年度に、計 22 名のインタビュー・データに基づき、日本人ムスリム女性のアイデンティティおよび社会への参加のあり方について分析をおこなった。その結果、下記の点が明らかとなった。第一に、インフォーマントの個人的背景とイスラームへの改宗との関係には多様性が存在している。第二に、イスラームと触れるきっかけとして海外旅行が重要な役割を果たしているが、同様に、インターネットやチャットを通じた経験もその共通する重要な経路となっている。第三に、いく人かのインフォーマントは、外国人のムスリム男性を夫としている一方で、独身のムスリム女性も多数いた。第四に、パートナーとの婚姻関係がイスラームの観点から観察されることで、その内容をめぐり交渉や改定がなされたりしている。第五に、インフォーマントが主たる家計維持の役割を果たしている場合が多く、そのことがジェンダー関係をより開かれたものとしている。第六に、イスラームに対する態度はさまざまであり、それぞれが置かれた状況に依存している。そして第七に、イスラームの知識の習得は、インフォーマントが自身の生活やパートナーとの関係をコントロールするのに寄与している。以上の結果は、日本人ムスリム女性がイス

ラーム理解や実践に対して受動的ではなく、より積極的に関与することで、自身のアイデンティティを構築していることを示している。

(2)マレーシアの新中産階級ムスリム女性研究

2016～2018 年度にかけて、マレーシアのマレー系女性を主たる対象とした質的調査に基づき、近代化とイスラーム化がいかに、ムスリム女性の身体の形成に影響を与えているかを探求した。

大学教員へのインタビュー調査

上記の目的のため、セランゴールおよびジョホールの大学教員へのインタビューを実施した。そのなかで、グローバル化のなかで急速に発展する近代化とイスラーム化が、どのように女性たちの労働市場への参加と家事役割の遂行と関わっているのかを聞き取りした。その結果、以下の点が明らかとなった。家族における性的役割を強調するイスラームは、一方で、女性の就労に一定の制限を課すことになるが、他方で、イスラームの伝統（特に、「知識」の強調）はまた、女性のきわめて高い高等教育へのアクセスを可能にし、就労機会を高める要因となっていることが示された。さらに、「大学教員」という職業選択の一つの理由として、労働におけるフレキシビリティが挙げられ、就労しつつも、家事役割を遂行しやすい点が重視されている。同様に、妻の職場と自宅との距離を、夫の職場と自宅との距離よりも短く設定することで（つまり、自宅を妻の職場に近い場所に置くことで）、女性が家事役割を遂行しやすい環境を作っていることが明らかとなった。

大学生を対象としたジェンダー意識をめぐる研究

マレーシアの国立大学の学生を対象としたフォーカス・グループを通じて、性差とリーダーシップの関係について検討した。その結果、以下の点が明らかとなった。第一に、＜男性性＝理性的＝リーダー＞、＜女性性＝感情的＝非リーダー＞という、ジェンダー化された認識枠組みが広く共有されていた。第二に、男性は怠惰で、女性は勤勉であると認識されていたが、これは＜決定者＝男性＞、＜従属者＝女性＞という枠組みを前提とするものであった。第三に、性差をめぐるステレオタイプは広く共有されていた一方で、それがリーダーシップとどれだけ関係するかは、集団によって違いがあった。男性および中国系は、女性のリーダーシップをより評価するのに対して、女性、とくにマレー系は、既存のジェンダー秩序を支持する傾向にあった。これは、部分的には、宗教的価値が影響している。以上の点を鑑みると、マレーシアでは性差をめぐる認識が維持されつつも、指導的立場に就く女性の数は今後も増大する余地があるといえよう。ただし、家庭と男性性とのつながりが強化されなければ、国家と社会が求める身体 国家の発展に寄与する「労働力」と同時に、夫に仕え家族を維持する「母・妻」への過大な規律化が、女性に強いられる危険があることには注意が必要である。

(3)イギリスの移民第二世代ムスリム研究

過去に得られた調査データおよび、2018 年度の補足調査をもとに、ポスト 9・11 時代において、イギリスの移民第二世代（以降の）ムスリムが、いかに信仰を維持しつつ、イギリス社会に参加しているのかについて明らかにした。その際、再帰的近代化論を分析枠組みとし、アイデンティティ管理やその自己呈示法に焦点を当てつつ、「ムスリムであること」と「イギリス人であること」がいかに結びつけられているのかを検討した。そのため、89 名（女性 57 名、男性 32 名）のイギリスの移民第二世代の若者ムスリムへのインタビュー・データを分析した。

その結果、以下の点が明らかとなった。インフォーマントは、日常的に差別やイスラモフォビアを経験している一方で、イギリスを「多文化空間」として定義することで、そのなかで「ムスリム」として生活することに困難を感じておらず、社会への愛着を示している。また、インフォーマントのイギリス社会への適応は、「(アジア系)文化」からの「宗教」の分離を通じて可能となっている。否定的に報道される慣行や考え方（ex. 強制による結婚、女性の自由の否定）を、「文化」に帰属させることで、イスラームをより積極的なものとして描くとともに、その西洋社会との両立を強調している。文化からの宗教の区別は、イスラームの「知識（ilm）」の習得と、その解釈の努力（ijtihad）によって実現されている。彼女／彼らは、文化的伝統と結びついたコミュニティの学者（imam）だけでなく、インターネットなどの多様な情報源から、自身の生活に適合する「イスラーム」の伝統や考え方を発見することで、イギリス社会への参加可能性を高めている。こうした点は、とりわけ女性の間で顕著であった。彼女たちは、イスラームが、女性の教育や社会参加に对立せず、逆にそれを促す宗教として呈示することで、自身の教育や就労を正当化している。また、抑圧の象徴として語られがちなヒジャブの着用を、イスラームを「自律性」や「内面性（iman）」を重視する宗教ととらえることで、女性自身の「決定」という契機を強調するとともに、「未着用者」への非難を控えている。

以上の分析から、イギリスの移民第二世代は、イスラームと「シティズンシップ（＝市民であること）」が対立せず、逆に前者が後者の前提となると考えていることが明らかとなった。

以上の三カ国の調査結果は、ムスリム女性をめぐる既存の理解（＝抑圧と管理の対象としての身体）を否定し、逆にそのエージェントとしての側面に光を当てたものである。それは、情報化を背景とした宗教的知識の習得と解釈を通じた、「信仰の個人化」によって可能となっている。この結論は、イスラームと西洋社会の「文明の衝突」史観を否定し、また近年、議論されている「多文化主義の失敗」言説の妥当性に疑問を突きつけるものである。本調査研究は、現代社会と

いう文脈のなかにおける、ムスリム女性と信仰との間の関係やアイデンティティ形成のあり方を体系的に探求した点で、学術的に価値あるものとなっている。加えて、イスラームを「生きられた宗教」としてとらえることで、歴史や教義を中心に紹介されてきた従来の宗教的理解を更新する点で、社会的にもまた大きな意義を有している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 安達智史	4. 巻 104
2. 論文標題 新中産階級ムスリム女性の労働と家事役割をめぐる意識 マレーシアの私立大学の教員を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学研究	6. 最初と最後の頁 177-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安達智史	4. 巻 14
2. 論文標題 イスラームを人間化する 多文化主義社会イギリスにおけるムスリム女性とヒジャブ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代社会学理論研究	6. 最初と最後の頁 6-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安達智史、橋本直子	4. 巻 14
2. 論文標題 いま、ここにあるグローバルー日本から考える多文化共生／難民支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 GR－同志社大学グローバル地域文化学会 紀要	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安達智史	4. 巻 12
2. 論文標題 多文化主義と西欧ムスリムー「閉鎖性」と「開放性」のアイデンティティ論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代社会学理論研究	6. 最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.34327/sstj.12.0_103	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安達智史	4. 巻 100
2. 論文標題 『日々生きられる宗教』としてのイスラーム 日本人ムスリム女性の事例から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学研究	6. 最初と最後の頁 181-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 安達智史
2. 発表標題 イスラームを人間化する イギリスのムスリム女性のヒジャブとシティズンシップ
3. 学会等名 同志社大学グローバル地域文化学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安達智史
2. 発表標題 Humanizing the Sacred 多文化社会イギリスにおける 女性ムスリムとヒジャブ
3. 学会等名 日本社会学理論学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安達智史
2. 発表標題 イギリスの若者女性ムスリムについて 『信仰』を通じた社会統合
3. 学会等名 「多文化共生」を考える研修会2019（招待講演）
4. 発表年 2019年

1．発表者名 安達智史
2．発表標題 マレーシア人大学生のジェンダーをめぐる性格と役割についての意識の分析 フォーカス・グループとマインドマップを活用して
3．学会等名 日本社会学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Satoshi Adachi
2．発表標題 Islam as “ Everyday Lived Religion ” : A Case Study of Japanese Muslim Women Converts
3．学会等名 XIX World Congress of Sociology (国際学会)
4．発表年 2018年

1．発表者名 安達智史
2．発表標題 なぜマレーシア人女性はよく働き、よく家事をするのか？－大学生のジェンダー意識の分析から
3．学会等名 立命館大学 / 近畿大学マレーシア校友会総会 (招待講演)
4．発表年 2019年

1．発表者名 安達智史
2．発表標題 社会統合モデルとしての「British Muslim」－移民第二・三世代ムスリムのアイデンティティ
3．学会等名 日本社会学会
4．発表年 2017年

1．発表者名 Satoshi Adachi
2．発表標題 Religious Knowledge and Muslim Women in the Information Age: A Case Study in Britain
3．学会等名 Third ISA Forum of Sociology (国際学会)
4．発表年 2016年

1．発表者名 安達智史
2．発表標題 日本人ムスリム女性のアイデンティティ・マネジメント ライフ・ヒストリーに基づいて
3．学会等名 日本社会学会
4．発表年 2016年

1．発表者名 安達智史
2．発表標題 イスラームとの「共存」？－マレーシア、イギリス、日本の女性ムスリム
3．学会等名 共存学公開研究会（招待講演）
4．発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1．著者名 安達 智史	4．発行年 2020年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 480
3．書名 再帰的近代のアイデンティティ論ーポスト9・11時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム	

1. 著者名 中西 真知子、鳥越 信吾 編、牛腸 政孝、近森 高明、坂井 晃介、赤堀 三郎、津村 将章、遠藤 英樹、片桐 雅隆、川崎 賢一、伊志嶺 絵里子、安達 智史、Richard Harris	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 280 (217-235)
3. 書名 グローバル社会の変容	

1. 著者名 Scott Lash and Johu Urry, 安達智史 (監訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 347
3. 書名 フローと再帰性の社会学 : 記号と空間の経済	

1. 著者名 山本須美子、斎藤里美、布川あゆみ、小山晶子、見原礼子、石川真作、植村清加、渋谷努、安達智史、鈴木規子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 344 (245-268)
3. 書名 ヨーロッパにおける移民第二世代の学校適応	

1. 著者名 古沢広祐、笠間直穂子、安達智史、加藤久子、武知正晃、黒澤直道、松本久史、高橋典史、杉内寛幸、ヘイヴンズ・ノルマン、菅浩二、苅田真司	4. 発行年 2017年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 272 (41-63)
3. 書名 共存学4 多文化世界の可能性	

1. 著者名 石井香世子、酒井千絵、滝澤三郎、陳天璽、奥野圭子、杉村美紀、真野俊樹、阿部るり、安達智史、中村文子、坂本麻衣子、杉木明子、稲葉美由紀、丸谷雄一郎	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 192 (103-112)
3. 書名 国際社会学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Rresearchmap https://researchmap.jp/s-adachi/ 近畿大学総合社会学部 https://research.kindai.ac.jp/profile/ja.db816bda6c8a4641.html 東北大学大学院文学研究科・文学部社会学研究室 http://www2.sal.tohoku.ac.jp/soc/cgi-bin/wiki.cgi?page=%B0%C2%C3%A3%C3%D2%BB%CB

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	フセイン ロージラ (Bee Mohd Hussain Rosila)	マラヤ大学・Faculty of Arts and Social Sciences・Senior Lecturer	
研究協力者	アミヌディン ノリッシュ (Aminudin Norish)	オープン・ユニバーシティ・マレーシア・Associate Professor	